

野生生物と農林業の共存

—北海道のエゾシカ被害を事例として—

名古屋市立大学 芸術工学部・奥田郁夫

北海学園大学 経済学部 ・古林英一

現在、北海道にエゾシカが何頭くらい生息しているのだろうか？北海道では、1999年度以降、毎年6万頭から8万頭ほどが捕獲されている。その一方で、この間、年々の農業被害額は30億円ほどで、減少傾向はみられない。つまり、年々エゾシカを捕獲していても、その総頭数が減少しているとは考えにくい、ということになる。また、エゾシカの年々の増加率は、15%~20%と推計されているので、たとえば、捕獲頭数7万頭および増加率20%として推計してみると、総頭数はおよそ35万頭である。

エゾシカは、明治初期に大雪と乱獲によって絶滅寸前にまで減少した、という。北海道では、このエゾシカを保護し、同時に増えすぎたエゾシカによる農林業への被害を抑制すべく管理する、という「保護管理」が重要な課題である。北海道（道庁）では、1998年度以降、「道東地域エゾシカ保護管理計画」および「エゾシカ保護管理計画」によって、農林業への被害の防止およびエゾシカの頭数管理を行ってきた。

間接的な農業被害防止対策の主なものは、農地などとエゾシカの生息域である林地の境界にフェンス（侵入防止柵）を設ける、というものである。2006年度末までに、その総延長は、3,300kmにおよんでいる。とくに被害の著しい地域は、エゾシカの越冬地である阿寒を中心とした地域である。この地域を中心に、フェンスが設置されてきている。このフェンスによる食害防止効果により、1996年度の農業被害額・約45億円から今日の30億円ほどにまで減少した、とされている。

また、直接的なエゾシカ管理手法としては、「フィードバック管理（順応的管理 adaptive management）」が適用されている。この手法では、毎年のモニタリング調査によって総頭数の推計をおこない、その推計値にもとづいて、保護管理が可能な水準にエゾシカの総頭数を調整しよう、というものである。この手法にもとづいて年々の捕獲頭数が決定される。

以上の農林業への被害防止対策と同時に、捕獲したエゾシカをどうするか、という点も課題となっている。北海道では、これを「資源」ととらえ、食肉化を具体化してきている。ただし、エゾシカ肉の流通に関しては、その供給量は、上に述べた捕獲頭数に依存するので、フィードバック管理の特性によって毎年変動するため、量的にまとまった安定供給体制の確立は容易ではない。

また、エゾシカの保護管理および食肉化に関しては、今日まで（社）エゾシカ協会が大きな役割を果たしてきている。今回の報告では、このエゾシカ協会発足の経緯から今日までの活動についても報告する。